○○してみました世界のフィールド

# 「国立民族学博物館コレクション 貝の道」を旅して

朝木 由香（あさき ゆか）
神奈川県立近代美術館学芸員

筆者とパプアニューギニアの彫像（H0164853）
「貝の道」展会場（神奈川県立近代美術館 葉山）

2018年夏、相模湾に面する神奈川県立近代美術館にて、みんぱく所蔵の貝細工の資料が展示された。今号では本展覧会「貝の道」の企画・担当者である朝木由香さんに貝をめぐる旅について寄稿してもらった。

昨夏、神奈川県立近代美術館の葉山館では、「国立民族学博物館コレクション　貝の道」展を開催した（六月二三日―九月二日）。本展はみんぱくの膨大なコレクションから約二六〇点の貝細工を紹介したもので、既にみんぱくと取り組んできた巡回展「アジアとヨーロッパの肖像」（二〇〇八―〇九年）、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」（二〇一〇―一一年）、当館企画展「ビーズ イン アフリカ」（二〇一二年）に続く四回目の共催展である。いずれも民族学、博物学、美術史学の対話の可能性を博物館と美術館の枠を越えて追究することを目的とし、今回の「貝の道」展では、日ごろ博物資料とされる貝細工に秘められた造形美を発見しながら、それぞれの貝細工が生まれた社会背景や生活文化を理解し、貝とわたしたちがどのような関係を育んできたのか、そのつながりと広がり――「貝の道」をたどった。

## 貝をつなぐ

二〇一七年、みんぱく開館四〇周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」を訪れた筆者は、会場を埋めつくす世界中のビーズの多種多様な色、形、大きさに圧倒された。とりわけ印象的だったのがビーズの素材である。人工物、鉱物に加え、動物の骨や歯（うろこ）、魚の鱗（うろこ）、鳥の卵や羽、昆虫、植物の種子など、いわゆる美術展では見かけないものばかりだ。なかでも貝ビーズの歴史はもっとも古く、今から七万年～一〇万年前の遺跡で穴のあけられた小さな巻貝が発掘されたという。

自然界に一〇万種類以上もの貝が生息しながら、普段、目にする貝はごく一部。そこから人びとが貝の殻を選び、ひとつひとつ手でつないできた営みには、いわゆる食用の貝とは異なる特別な意味が込められてきたのだろう。個々の特徴を活かしながら、切ったり削ったりと造形的にも創意工夫に溢（あふ）れている。

これら世界中の民族による貝ビーズを見ながら、ふと、アナツイの作品を想った。人が手に触れ、口にして捨てた大量のワイン・キャップが、あらたに手で縫いつなげられることで美しい織物状の作品に蘇（よみがえ）ることと、名もなき人びとが貝殻を拾い集めて作る貝ビーズには親和性が感じられたからだ。

世界中のさまざまな貝ビーズ（「貝の道」展会場　撮影：阿部健）

コンゴ民主共和国の帽子（H0175275）
（「貝の道」展会場　撮影：阿部健）

★
日本
神奈川県葉山

## タカラガイの道

本展ではとりわけタカラガイに注目した。白くてぷっくりとした背中とギザギザしたお腹の模様を特徴とするこの貝は、生物学的には熱帯から日本を含む温帯の海にかけて生息し、葉山の海にも散見する。なかでもキイロダカラとハナビラダカラは古来、人の手を介して海をわたり、遠く内陸にまで運ばれて貝貨や装身具として用いられてきた点で民族学的にも興味深い。本展監修者である国立民族学博物館の池谷和信（いけや かずのぶ）教授は「どうして人類は地域を越えて、時代を越えてタカラガイを求めるのか。美しさを求める人類という視点からこの貝に関心を持っている」と話し、「タカラガイの道」を古代から近世にかけての「貨幣の道」と、近現代以降の「装飾の道」にわけ、その用途は時代とともに変化してきたと指摘する。

みんぱくの所蔵品をタカラガイの視点で改めてとらえると、アフリカ、アジア、オセアニアに広がる「装飾の道」が見えてきた。アフリカではエチオピア高原、コンゴ盆地、カメルーン高地などの内陸部までタカラガイは運ばれた。コートジボワールのダン族やカメルーンのベコム族の儀礼用の仮面、コンゴ民主共和国のクバ族の帽子やベルトなどを見ると、タカラガイを十文字型に並べたり、帽子全体を覆うなど個々さまざまで、黒褐色の木やラフィアに白いタカラガイは一層映える。アジアでは、カラーシャ族の頭飾りやパイワン族の衣装をはじめ、色鮮やかな織物や刺繍（ししゅう）布にガラス玉、コイン、数珠などの素材とあわせて縫い込められている。一方、海に囲まれ、古くから地域間の交易が盛んなオセアニアでは伝統的な貝貨や婚資用の装飾品に、タカラガイ、イモガイ、クロチョウガイ、ムシロガイなど大小さまざまな貝が用いられている。パプアニューギニアのセピック川流域に見られる「神像付きの椅子」の顔には全部で六種類もの貝が施されている。

このように、タカラガイがたどった道からは、それぞれの地域の人びとの貝への思いや、地域を越えた交易のネットワークの広がりが見えてくるとともに、その造形的な面白さは見る者を魅了する。最後に、当館の目の前にある葉山の貝の道も紹介したい。会期中、隣接する葉山しおさい博物館と協力して、海岸で生きた貝を拾ったり、地層に眠る貝の化石を顕微鏡で観察するワークショップをおこなった。まさしく時空を越えて今につながる貝の道を旅した夏であった。

ワークショップ「海の生き物を観察しよう」（葉山 一色海岸　2018年7月）